京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | アジアにおける日本人墓標の諸相 --その記録と研究史-- |
| Author(s) | 角南, 聡一郎 |
| Citation | 人文學報 = The Zinbun Gakuhō : Journal of Humanities (2015), 108: 3-20 |
| Issue Date | 2015-12-30 |
| URL | https://doi.org/10.14989/204513 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

Kyoto University

『人文学報』第108号（2015年 12 月）
（京都大学人文科学研究所）

# アジアにおける日本人墓標の諸相

## ―― その記録と研究史 ――

角　南　聡一郎*

## 1. は　じ　め　に

開国後の近代に，日本人は世界各地に大量に移住・移動するようになった。移住先で亡くなった場合に，多くの場合は日本人墓地という独立した区画を形成し，埋葬され墓標が建立された。本稿では，特にアジアにおける日本人の墓地墓標についてそれらの記録や研究について概観する。その上で各地の墓標形態を中心に検討を試みる。

墓標はそれぞれの民族性を反映することが知られ，その形態は国々で異なっている。日本でもこれまで独自の墓標が建立されてきた。後述する「日式墓標」がそれである。移住先でも当然ながら母国同様に「日式墓標」が建立されるのが普通である。移住一世であっても，現地の型式に影響される墓標はないのだろうか。また，旧植民地である戦後台湾では，戦後も台湾人の墓に日式墓標が採用され展開することが知られる（角南 2006）。この現象が極めて特異なものであることを確認するためにも，他の旧植民地や非植民地へ移住した人々の墓標との比較が肝要であろう。

## 2. 日本における墓標の種類

まず日本における墓標の種類を見ておきたい。墓標は大別すると塔系と碑系の二つがある（角南 2014）。塔系には五輪塔や無縫塔がある。五輪塔とは，密教で説く五大を表す五つの形から成る塔のことで，地輪・水輪・火輪・風輪・空輪の順に積み上げる。各面に五大の種子を刻む。平安時代中期以降，五輪塔は供養塔として用いられ，鎌倉時代になると墓標として建立された。五輪塔には，四つの部材よりなる組み合わせ式（多石）五輪塔，一つの石で五輪を表現

* すなみ　そういちろう　㈶元興寺文化財研究所総括研究員

した一石五輪塔，その一石五輪塔を縦方向に半裁した半裁五輪塔，舟形石に五輪塔を浮彫にした舟形五輪塔などがある。無縫塔は塔身の形が卵の形状に似ていて，縫い目がないことより無縫塔もしくは卵塔と呼ばれる。

碑系墓標は竿石上端が櫛に類似する櫛形，櫛形の両端部に隅入を有する隅入櫛形，断面が長方形を呈し竿部左右上端を丸くする隅丸形，竿部平面形態が舟に類似する舟形，竿部に屋根があり廟に類似する廟形，竿部が断面正方形で柱状を呈する方柱状，竿部の先端が圭に似て山形を呈する圭頭状などがある。しかしながら，このような分類と名称は研究者によって様々である。一例を示しておく（図1）。

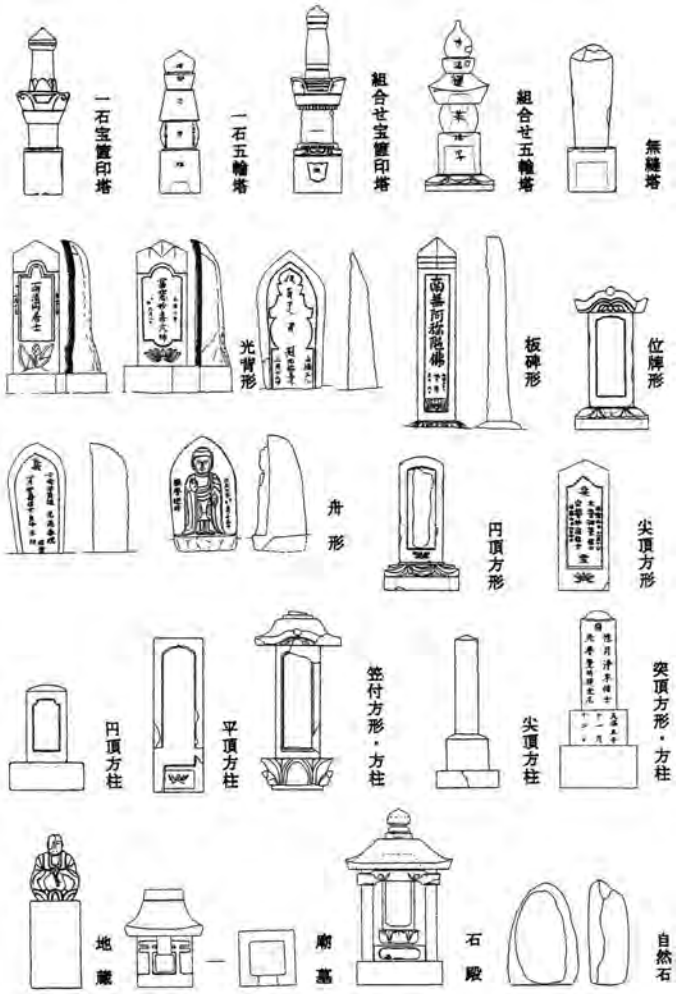


図1　近世墓標の分類

以上のようなものが日本独自の墓標と言えるが，このうち近代に入ってからは櫛形墓標も一定数あるものの，方柱状墓標が主流となる。竿部の形態以外にも葬法等の変化に伴う改変も認められる。近代に入ると個人墓から家族墓へと変わり，土葬から火葬への移行に伴う墓の地下構造にも変化が生じた。

## 3. 近代以前のアジアにおける日本人墓

近代以前に日本人がアジア各地へと移住したことは当然ながらあった。最も古い記録は中国へ留学した遣唐使，遣隋使であろう。留学生の中には現地で亡くなった者もいた。遺体は現地に埋葬されたと考えられる。近年，唐時代の日本人留学生・井真成（いのまなり）の墓誌が西安の郊外で発見され話題となった。これにより，留学生の墓が造営されていたことが確認された（王 2008）。

14 世紀中～18 世紀頃にアユタヤ（タイ）には日本人町があった。特によく知られているのは，山田長政（？～1630）である。ここには一時約 2000 人の日本人が居住していたとされるが，墓地，墓標は発見されていない

ベトナム・ホイアン市には，17 世紀の日本人の墓 3 基がある。これは古くから知られており，日本人研究者による報告もある。「谷弥次郎兵衛の墓」，「潘二郎墓」，「具足君墓」がそれである。歴史学者・黒板勝美（1874-1946）は昭和 2 年（1927）に，渡欧の途路にホイアンを訪れて日本人墓の調査を実施した。黒板によるとフェイフォ（會安）には「谷弥次郎兵衛の墓」があり，「丁亥年」銘より正保 4 年（1647）の建立とした。これは墓石の大きさなどから当時のベトナムにおける上流階級に相当する墳墓であると考えた。またタンアン（新安）の共同墓地には「具足君墓」があり，「乙巳年」銘より寛永 6 年（1629）の建立とした。同じくタンアンの村内には「潘二郎墓」があり，「乙巳年」銘より寛文 5 年（1665）の建立と考えた。黒板が訪れた当時，既にこれら日本人墓の破損が進行しており，保存修復の必要性があること，それに対して地元の日本人から具体的な要望があったことなどが記されている（黒板 1928・1940）。

これらの日本人墓の調査は国内で反響があったようで，岸和田市嘱託であった田辺納の仏領印度支那調査報告にも，「出発以来希望してゐた南日本人墓地の参拝に行くことにした」とあり，「具足君墓」と「谷弥次郎兵衛の墓」の墓参をしたことが記されている（田辺 1941 : 30-31）。林業試験所技師であった明永久次郎も，「潘二郎墓」及び「谷弥次郎兵衛の墓」を訪れている（明永 1943 : 86-88）。

「谷弥次郎兵衛の墓」については 1997 年，奈良文化財研究所により発掘調査が（高瀬 1998，図 2），昭和女子大学により保存科学的調査が実施されている（武田 1999）。これらの墓に共通

するのは，墓の形態が日本的ではなく，「谷弥次郎兵衛の墓」に見られるようなカタツムリ形飾りの存在，平面形態が亀甲墓に類似する点などから，総じて中国的であるといえる。フェイフォには日本人町とともに中国人町があった。

同年に黒板はインドネシアの日本人墓標についても記録を残している（黒板 1928）。墓標はバタビアの日本総領事館にあり，「ミチェル・ソウベイ」という人物のものであった。元来はどこにあったかは不明であるが，どこかの橋か何かに転用されていたものが日本人の墓標であるということが判明し，総領事館に持ち込まれたものという。花崗岩製で高さ二尺八寸四分，幅二尺八寸一分，厚さ二尺三寸八分である。「安永」という銘の他に，オランダ語で「此所に尊敬すべき日本人キリスト教徒ミチェル・ソウベイ安息す，1605 年 8 月 15 日長崎生まれ，1663 年 4 月 19 日死す」とある。キリスト教徒である「惣兵衛」は慶長 10 年長崎生まれで寛文 3 年に 58 才にて当地で没した。寛文 3 年は既に鎖国となってからしばらくたっている時期である。

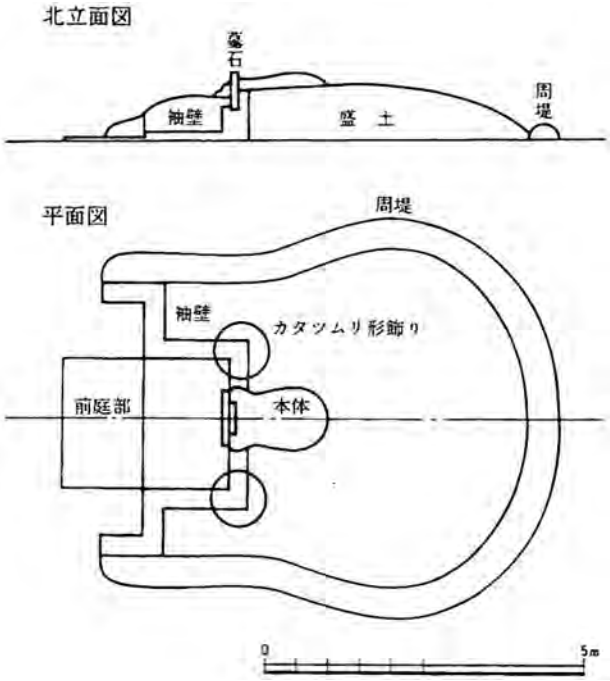

図 2　谷墓復元図

北方では日本人漂流民の墓がいくつか知られる。代表的なものを二三示しておこう。

1793 年（寛政 5）に，宮城県石巻港から若宮丸に乗って出港した 16 人の乗組員が，その後遭難漂流した。その中の 4 人は，数奇な運命をたどって文字通り世界一周を果たし，13 年後の 1806 年（文化 3）に故郷の石巻に戻ってきた。これに対して仙台藩による漂流民の記録『環海異聞』が 1807 年に刊行された。1894 年に『環海異聞』をもとにして明治になって出版されたものが，『寛政年間仙台漂客世界周航実記』であった。

この漂流民一行の中に吉郎次という老人がおり，彼はイルクーツクで死去しその地に葬られた。そして，それから約 100 年余り後の吉郎次の墓の発見には，新聞記者・玉井喜作（1866-1906）とドイツ人フーゴ・ムルケと大審院判事小宮美保松（1859-1935，明治～大正時代の司法官）の 3 人が関係しているという（泉 2006）。

ムルケは数十年イルクーツクに在住する時計商であり，玉井とイルクーツク時代に面識があり，また両者はその後ベルリンでも会っている。小宮美保松は，司法制度研究のため 1899 年（明治 32）に洋行し，ベルリンで，玉井に会っている。小宮はその後シベリア経由で帰国する 1900 年の夏にイルクーツクに立ち寄り，ムルケの案内で吉郎次の墓を発見した。

仙台藩の大槻玄沢の『環海異聞』には，「イルコーツカの墓所に，竹内徳兵衛と彫付たる石塔有り，又享保十干支湮滅年何々と彫りたる日本字の石塔有り」（石井編 1908）と見える。『寛政年間仙台漂客世界周航実記』には墓標について更に詳しい記述がある。以下長文となるが引用する。

> 寛政十一年乙未同行の中竹浜吉郎次病死せり，彼国の宗旨に入らざる故寺にも送られず，棺屋にて棺を求めて死骸を納め其儘葬送せり，一体墓所も寺にはなく，町より余程引離れたる処にあり，壙穴の深さ八尺より色々あり，土地一体に寒き国ゆえ，暖気の時予て墓原の場所へ深浅様々の穴幾個も堀置きあるを以て，施主よりも其穴を見立て買ひ求め之を葬るなり，深と浅と値に高下あり，此度も右に云ふ堀置の穴を買受け，何れも附添こて墓所へ送り埋葬せり，追々石を求めて日本風の石塔を建て，碑面に「日本国奥州仙台牡鹿郡小竹浜安部屋吉次郎，寛政十一年二月二十八日七十三歳」と彫付けたり，書手も同行の中真文字に認め，太十郎彫刻せり，其時辺り墓原を見しに，『竹内徳兵衛』と俗名を彫付けたる石塔あり，又享保十年（干支磨滅）と彫付けたる石塔あり，是は南部より標流せし者此地に留りし事ありと聞けり，其輩の墓所なるにや，数十年前の事よし，又其近辺に『松本村九平』とのみ彫付けたる石塔あり，是は伊勢光太夫の同行の者なるにや（小原編 1894：70-72）。

つまり，吉郎次の墓標は「日本風の石塔」であったこと，この前にもイルクーツクにはいくつかの日本人漂流者の墓標があつたことがわかる。「竹内徳兵衛」は 1744 年（延享元年）11 月 14 日，新造船「多賀丸」に水主 16 名と共に乗り込み江戸を目指して漂流した，下北半島佐井村の商人竹内徳兵衛のことである（木崎 1977）。この他にも享保 10 年（1725）に建立された「石塔」や大黒屋光太夫（1751-1828）の同行者の「石塔」があったという。光太夫がイルクーツクに立ち寄ったのは，寛政元年（1789）のことである。

これまで取り上げてきた日本人墓標とはやや性格が異なるものに，琉球人の墓がある。最もよく知られている墓は福建省福州市のものである。倉山区の中国人墓地の中に 18 世紀～19 世紀半ばの琉球人墓標 9 基が点在する（徐 1991）。

## 4. アジアにおける日本人墓地の諸相

では近代以降の移住者の墓はどのようなものがあるのだろうか。日本人が居住した場所には，台湾，朝鮮，樺太，満州といった旧植民地，上海，福州等の租界，非植民地があげられる。

まず旧植民地について見てみよう。仁川市の日本人墓地は1884年に仁川市中区新興洞（신흥동）に初めて設置された。死者は壬午軍乱（1882年）と甲申政変（1884年）の時に死亡した日本人を埋葬したものである。その後1902年に仁川市中区栗木洞（율목동）に移転され終戦を迎えた。この墓地も戦後に移転案が巻き起こった。移転候補地を方面とし，現在の墓地は美観を害し衛生的に良くないという理由で，西串（現富平区）に移転となり跡地は公園となった。日本人墓地は戦後に荒らされ，墓標は倒されおり，中には墓中が暴かれて遺骨が取り出されているものもあった（小谷1952）。

現在，移転先は富平区仁川家族公園となっており，日本人墓地に墓標54基が残されている（写真1）。

写真1　仁川日本人墓地

ソウル特別市中浪区忘憂里共同墓地内には2基の日本人墓標が存在する。このうちの1基は朝鮮の民芸運動の中心となって活動したことで知られる，浅川巧（1891-1931）のものである（写真2）。

写真2　浅川巧の墓

昭和21年（1946）7月に，釜山市内にある日本人寺院内に安置されていた，日本人の遺骨約8,000柱を釜山市谷町の共同墓地に納骨し，墓標を建立した。竿部正面には，「日本人無縁仏の墓」，裏面に「昭和二十一年七月／釜山日本人世話会建之」と刻された。しかし，1950年～1953年の朝鮮戦争により，釜山は臨時首都となるなどして，この墓標の痕跡を確認できなくなっていた。そこで釜山市はこれに代わる墓碑を釜山市釜山鎮区唐甘洞山二番地に設置した（丸山1966：48-51）。

釜山市西区の峨嵋洞地区の日本人墓地には，300基ほどの墓標が建立されていたが，

釜の穴

# 日本人の墓、建築資材に

## 戦争避難「仕方なく」
## 盆と正月はお供え物

峨嵋洞地区　迫る再開発、行き場なくす恐れ

「墓石は作業之」と刻まれた墓石は、家敷とともに路上に放置されていた　＝韓国釜山市西区峨嵋洞

墓の土台に使われ、上に板木鉢が置かれているのは「北村家之墓」と刻まれた墓石だった　＝韓国釜山市西区峨嵋洞

市立公園墓地に安置され、在韓日本人婦人会の会「芙蓉会」が管理している日本人の位牌1528柱　＝韓国釜山市金井区

図 3　釜山市峨嵋洞地区の転用された日本人墓標の記事

朝鮮戦争により避難して来た人々の居住地となった。この際に墓標は建築資材として転用された。毎年日本の盆にあたる秋夕と正月には，自分の先祖の他に見知らぬ日本人のために供え物をするという住人もいる。墓石とは別に，位牌は他の墓地のものと合わせ全部で 1528 柱が，同市金井区の市立公園墓地に安置されている。在韓日本婦人芙蓉会釜山本部と在釜山日本総領事館で毎秋慰霊祭を執り行っているという（甲木 2009，図 3）。

平壌市龍山墓地日本人埋葬者名簿及び埋葬地の平面図は，日本敗戦後に旧満州などから北朝鮮平壌市に避難をしたが，栄養失調，寒さ，病気などにより死亡した昭和 21 年（1946）4 月 4 日現在での 2421 名の名前が記されている。時期は 1945 年 10 月ごろから 1946 年 4 月初めまでの寒い時期のことで，遺体の埋葬や墓地の改修整備，さらに名簿の作成などに，墓地の近隣にいた「大馳嶺避難民団」の有志と平壌日本人会が協力をした。墓標はなく一基の墓に 4，5 体ずつが埋葬されているという[1)]。また平壌市内の鞍山火葬場にも 2757 人が埋葬されたという（伊藤 2012）。

新京（長春）をはじめとした南満州鉄道附属地では，鉄道の創業と同時に沿線主要市街に設置された。明治 41 年（1908）9 月「附属地使用規則」を規定し極めて低廉なる料金によって一般の使用を許し，坪数は 10 坪以内とすること等を定めた。当初は遺骨を郷里に送還する関係

上，日本人の墓地使用は頗る寥々たるもので，しかもその多くは残灰を埋め一基の木製墓標を建てるに過ぎなかった。会社は大正 11 年 6 月共同墓地の維持管理に関して植樹その他の注意を促し，同年 9 月には遺骨を故郷に埋葬する者に対しては使用を許可せず，使用の際には必ず石製墓標を建立することを規定した。共同墓地は 29 箇所で，営口，安東の両地には「鮮人墓地」，撫順には「満人墓地」が併設されている（南満州鉄道株式会社地方部残務整理委員会編 1939：535–536）。

俳優・森繁久彌は戦前に満州里の日本人墓地を訪れている。シベリア出兵で亡くなった兵士のものであろうとし，小さな石に「陸軍一等兵　何某」などと刻字されたものが点在していた。これらの中に「〇〇トメ　十八歳」などと読める墓標が混在している。これらは「からゆきさん」のものだろうと記している（森繁 1957：220–222）。

中国黒竜江省ハルピン市方正県には，この地で亡くなった満蒙開拓移民団の墓標がある。この墓標は，戦後に残留した日本人によって発見された人骨を合葬したものである。墓標は省及び地元政府によって建立された。墓標は文化大革命の時にも破壊されることなく，保護されてきたという（岩間 2013）。

終戦前後に没した人々は時間的に余裕がなく，墓標が建立されることは少なかった。これはシベリア抑留で亡くなった人々にもいえることである（クズネツォフ 1993）。

新京日本人墓地は，現在墓標は一基も建っておらず，ここが墓地であったという痕跡は全くないという（宮尾 1998）。

広東省河南南石頭崗に日本人墓地があった。当地で明治 43 年に墓地設置の動きがあったものの，実際には大正 7 年 12 月に設置されたという（森 1922：60）。

上海居留地にも日本人墓地があった。明治 6 年（1873）に外務省が卡徳路に日本人共同墓地を設置した。明治 40 年（1907）に有志により法光株式会社を設立しこれが運営する火葬場を宝山県に設置した。明治 44 年（1911）に上海居留民団は法光株式会社を買収し，同時に狭隘となった卡徳路墓地も宝山県へと移転した（江南 1923：157–158）。

北京の日本人墓地は朝陽門にあった。戦後は一時日本人が墓守をしていたが，やがて中国人がその任に就いた。しかしながら，戦後の以下の記録のごとく墓地は荒廃していった。

> 沢山の墓石がひっくり返されていた。奥の方の畑の中に点々とある軍人の石碑は，殊に大きいが，それがひっくり返されていて一寸動かせない。それでも，小さいのは大部分を回復したが，墓石が割られているものもある。なる程と思ったのは，韓国人の墓石であった。敗戦以来「居を共にせず」とでもいう訳か，持ち帰った人もあるとのことで，これも荒れていた（国松 1961：87）。

福州市の郊外，前嶺山には古くからの共同墓地で，居留地があった関係からか日本人や台湾人も埋葬されていたという[2)]。

非植民地では，ロシア，シンガポール，マレーシア，インドネシア，香港，インド，スリランカなどに戦前からの日本人墓地がある。

ウラジオストックにも日本人墓地が古くから設置されていた。当時の案内書にも次のように紹介されている。

> 浦潮市街の北方一番川に達する道路の両側に在り，累々幾十百，金属製の花環は瑟々北風に鳴る，日本人の墓地は別に一区を成して斜面の上部に在り，墓標幾十基，無名の英雄空しく志を齎して異域に逝く，悲又惨。因に記す日本人墓地は漸次狭隘を告ぐるに至りしを以て，今回露政府より特に借地の許可を一番川先に得て墓地を新設し，併せて火葬場を築造すると事と為れり（角田編 1902）。

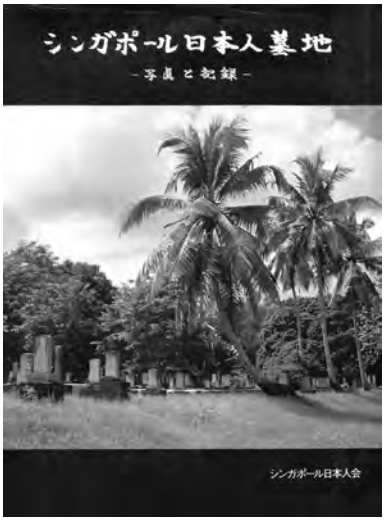


図４ 『シンガポール日本人墓地』

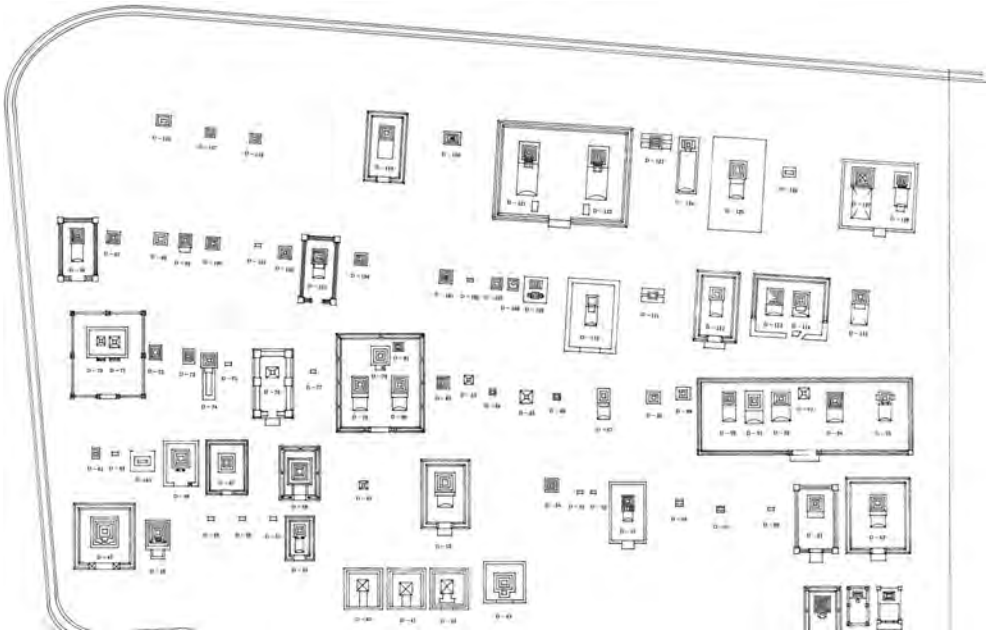

図５ シンガポール日本人墓地の平面図

シンガポールではシンガポール日本人会を中心に，日本人墓地の平面図，1基ごとの写真，銘文の記録など詳細な記録がなされ『シンガポール日本人墓地』として一冊に纏められた（樋口・勝・川田編 1983，図4・図5）。これに対し作家の石牟礼道子は次のように絶賛している。

「このお方のなさっていることを，宗教感情などといえば，ことがらを矮小化することになりそうである。一基の墓を通じて，墓ともいえない土饅頭を通じて，いやそれらをこのような形に編んで下さった本書にわたしたちは光を感じる」（石牟礼 1989：6）。これを手本とした日本人墓地，墓標の記録は，クアラルンプール，香港でも行われた（市川・小筆・森編 1991，香港日本人倶楽部墓地管理委員会編 2006，図6）。

図6　『クアラルンプール日本人墓地』

経済学者の原不二夫は，マレーシアの農業移民の調査をおこなう中で，各地に残された日本人墓地を訪れ，戦後の運命と現状について記録されている。これによると，マレーシア国内には27ヶ所程度の日本人墓地が存在するという（原 1987，図7）。

考古学者・朽木量は原による調査を踏まえて，マレー半島のシンガポールも，クアラルンプール，イポー，ペナン，マラッカ，ジョホール・バルの6つの日本人墓の調査を物資文化の観点より実施している。この結果として，以下のような点を指摘した。墓標形態で見る限り，移民の半数は日本国内で一般的に見られる墓標形態と同じものを用いているが，残りは中国式，西洋式，イスラム式の墓標を転用している。特に中国式の墓標は初期段階から多用されていた。また，銘文を明朝体で表記した墓標も散見された。日本では明朝体はあまり用いられない。明朝体の碑文は中国人墓地で多く認められることから，墓標製作を中国人石工に依頼したことから発生した傾向であると考えられる。男女比はいずれの墓地でも女性の被葬者が多いが，これは「からゆきさん」の活動を反映していると考えられる。ただし，女性の優位は1910年がピークであり，それ以降は男性が多くなる。これは軍人軍属の被葬者が増えるためだと考えられる。墓標の材質は花崗岩製が主流で，コンクリートなどで自作したと思われるものは少ない（朽木 2008：29-30）。

マレーシア・サバ州サンダカンの墓地は古くから多くの人々に注目されている（山崎 1977，小竹 1991）。それらの記述の中には以下のように墓地の管理運営の様子を窺い知ることができるものもある。

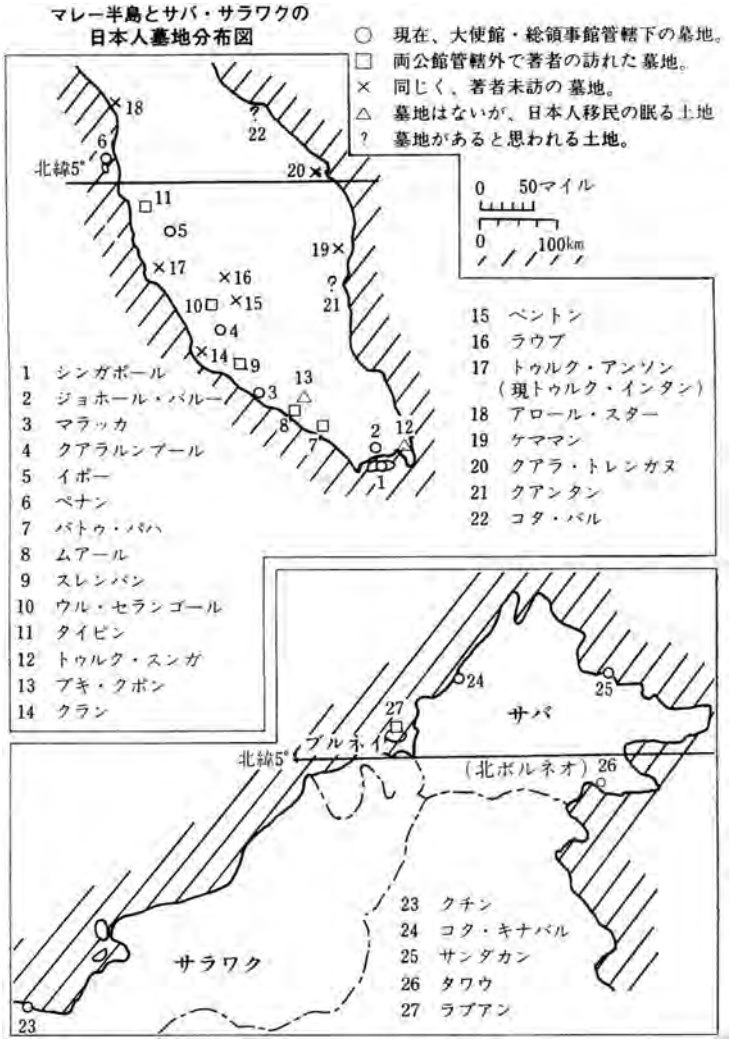


図７　マレー半島とサバ・サラワクの日本人墓地

支那人の墓地に並んで二百坪ばかりの日本人墓地は，百余りの墓の主が，大抵女で，古きは土饅頭ばかり，然らざれば一本の木標に，雨風に打たれて文字の定かならぬが多い。何れも石材は日本から取り寄せたのだ。この墓地の管理運営に多額の資金を出資していた熊本県出身の木下クニは，生前にこの墓地に墓標を建立していた。（坪谷 1917 : 47-48）

政治学者・上東輝夫も，サンダカンをはじめとした東マレーシアの日本人墓地を踏査している（上東 2001・2007）。この後のマレイシア各地日本人会による調査では，29ヶ所が確認されている（マレイシア各地日本人会編 1999，図 8）[3]。

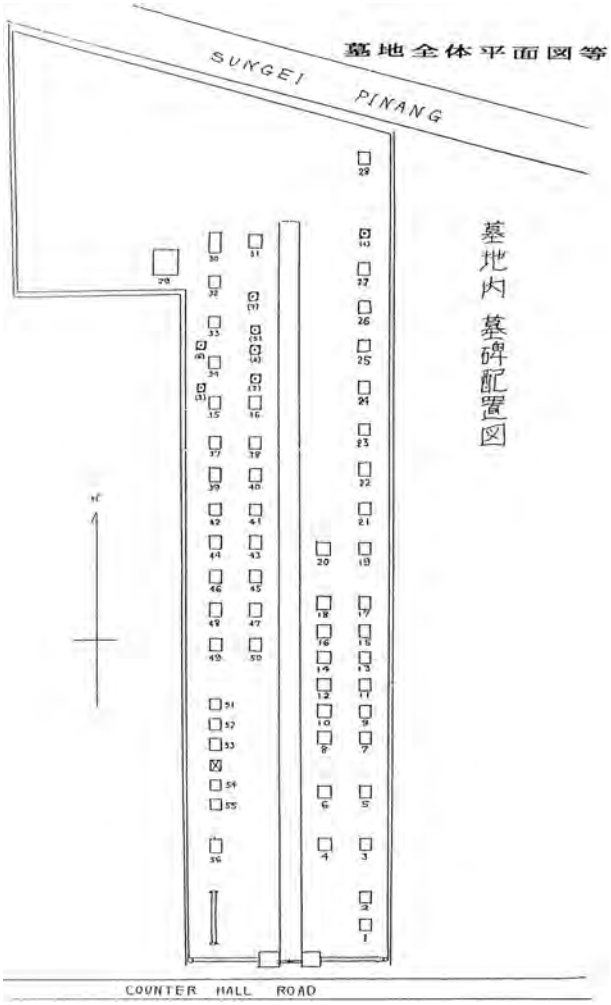


図８　ペナン日本人墓地概念図

インドネシア・西カリマンタン州ポンティアナの日本人墓地は，市内南方のオランダ兵営所在地後方にある。墓標は約 30 基あり，その過半は「娘子軍」のものである。その他にも市中央部の共同墓地にもある（多田 1917 : 208）。

北スマトラ州メダンでもペチサ日本人墓地の開設以来，多くの日本人がここに埋葬された。1900 年，「成立会」は，「スマトラ日本人協会」と改称した。日本人協会はメダンに本部を置きデリー州全体の墓地に，二百有余の墓があったと伝えられている。しかし，多くの墓は土饅頭で朽ちれば消滅してしまう木製の卒塔婆だった。1929 年に開校したメダン日本人学校には男子部は日本人墓地の用地買収に奔走した。それまでは日本人が亡くなると，頭を下げて中国人南京墓地に埋葬させてもらっていた。ペチサ墓地購入直後，オランダ人に囲われていた女性

が洪水に流されて水死し，初めてここに土饅頭の墓ができた（青木 2013 : 128）。

ペチサ日本人墓地は，現在は市街地となっている。戦後新たに設けられたデリー・トゥア日本人墓地は，メダンの中心から南に車で小一時間行ったところにある。墓地に埋葬されているのは，多くが第二次世界大戦に関わった戦死者である。それ以外の人々で埋葬者名簿に掲載されているのは 54 名に過ぎない。名簿が作成された 1992 年当時で，氏名が不明な埋葬者は 225 名に上るという（青木 2013 : 143）。

フイリッピン・バギオのベンケット道路設営で犠牲となった日本人の合葬墓が，大正 11 年（1922）に，バギオ日本人会により建立された。竿部正面には「先亡同胞諸精霊菩提塔」と刻されている（豊島 1936 : 87）。竿部形態は圭頭方柱状である。

香港の日本人墓地は，香港政府が管理する香港墳場内にある（写真 3）。1973 年当時，運輸省鉄道監査局勤務の赤岩昭滋により，詳細な悉皆調査と研究がなされた（赤岩 1973）。これによれば，この墳墓には明治 11 年（1878）から昭和 20 年（1945）の間に香港で没した日本人 465 人が埋葬されているという。赤岩の研究をもとに更に香港人により研究が深められている（羅・陳 2006，Lim 2011）。

羅燕妮と陳文耀は，墓標の分析から以下のようにこれら日本人の特徴を指摘した。大多数の人は長崎一帯の貧しい地域から来ていた。職業は船員が最も多く，次は「からゆきさん」であった（羅・陳 2006）。

インドのムンバイ市には最盛期 3000 人の日本人が居住していた。日本人墓地は明治 41 年（1908）にボンベイ日本人会により市内ウォルリー地区に設置されている。現在は供養塔 1 基が建立されている（インド・ムンバイ日本人会編 2009）。

スリランカ・コロンボの日本人墓地は，日本人墓地はカナッテ市営墓地の一画にあり，門柱には昭和 3 年（1928）11 月，錫蘭日本人会という銘が認められる[4)]。

写真 3　香港日本人墓地

## 5. 台湾の日式墓標とその特徴

台湾にも日本人墓地は多数存在したが，他の植民地と少し様相が異なっていた。近年台湾の研究者は，先の方柱状墓標のことを「日式墓標」と呼ぶ（写真 4）。これは日本の植民地支配を受けるまでは，台湾の漢民族にも原住民族にもなく，方柱墓標が日本に由来するものという理

解からの呼称である。漢民族は亀甲墓に板状長方形の墓標を用い，原住民族は基本的に屋内埋葬で墓標を建てなかった。戦前の日本植民地時代には多くの日本人が居住し，各地に墓地が設けられた。これらのほとんどは日式墓標であった。戦前に台湾人の中にも皇民化政策に同調し，日式の生活スタイルや墓標を受容した場合もあった。戦後，日本人は引き揚げたものの，台湾人の墓標にも日式が用い知られ続けるという現象がおこった。高雄市覆鼎金公墓は戦前に日本人墓地もあり，戦後も台湾人の日式墓標が多く建立されたなど，一連の流れを理解するのによい墓地である[5)]。現在，台湾の人々にはこのような日式墓標は日本とは無関係であると認識されている。しかし基礎が4段以上になるとか，煉瓦を積み上げその上からセメントを塗って石製のものを模倣するなど，形や素材などで日本の墓標そのものとは異なっているものが多い。いずれにせよ，植民地支配を受けた台湾人により，戦後も日本のかたちが引き続き使用されているというケースである。

写真4　高雄市覆鼎金公墓の日式墓標

## 6. お　わ　り　に

アジアの植民地，非植民地の事例からすると，日本人は日式墓標を採用したことがわかる。これまでみたように，戦後の旧植民地では日本人の墓標は破壊，処分されるなどして姿を消した。台湾同様に朝鮮でも同化政策が実施され，日本文化の押しつけがなされた。しかし，戦前に日本式の墓標が建立されたということは寡聞にして知らない。韓国では少数の墓標が現存もしているが，そのかたちをわざわざ採用しているという例を知らない。非植民地では日本人はマイノリティーであり，墓標は日本式のものであることがほとんどであるが，朽木量が指摘するように現地の墓標のかたちを採用するものが少なからずあった。これは現地社会との関係や同化の過程を示すものと考えられる。

前述したごとく，台湾では日本に起源をもつ日式墓標が，戦後も形を変えながらも継続して建立され続けている。このような現象がおこったのは台湾だけである。その理由は単に墓の面積が少ないという経済的理由や，火葬にマッチしたかたちであるというものだけだったのだろうか。台湾では意識されなくとも，具現化される過程で日本の文化やイメージの残像が潜んでいたのではなかろうか。戦前から戦後の台湾と日本の関係を考察する場合，意識される部分は

当然ながら無意識の連続もあり得るということが，墓標という物質文化をして物語ることができると考えられる。

**付記**　本稿は，2014 年 10 月 5 日に京都大学人文科学研究所に於いて開催された，ワークショップ「帝国日本と民間信仰」にて「アジアにおける日式墓標の諸相 ―― 台湾を中心として ――」として報告した内容をもとに成文化したものである。当日，コメンテータを務めていただいた大谷栄一，川瀬貴也，西村明の諸先生，そもそもの企画者である菊地暁先生，当日会場でご教示を頂いた方々に感謝したい。

また，本稿をなすにあたっては，平成 26 年度科学研究費補助金（A）「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究 ―― 台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」による成果を含んでいる。

**注**

1）　NPO 法人 戦没者追悼と平和の会
http : //www.senbotsusya.com/image/map.pdf（2015 年 3 月 31 日閲覧）

2）「前嶺山の墓地　第 57 回」『亜東印画輯』第 4 冊（1929 年 4 月）
東洋文庫現代中国研究資料室
http : //www.tbcas.jp/ja/lib/lib3/004/index.html#page=38（2015 年 3 月 31 日閲覧）

3）　29ヶ所とは次のものである。クアラルンプール（KL 連邦直轄地），ラブアン（ラブアン連邦直轄区），ムア，ブキット・クポン，バト・パハット，トロ・スンガイ，スガマット，センガット，ジョホール・バル（以上ジョホール州），アロー・スター（ケダ州），コタ・バル（クランタン州），マラッカ（マラッカ州），スレンバン（ヌグリ・スンビラン州），ブントゥン，ラブゥ（以上パハン州），イポー，トゥル・アンソン，タイピン（以上ペラ州），ペナン（ペナン州），コタ・キナバル，サンダカン，タワゥ（以上サバ州），ミリ，クチン（以上サラワク州），クラン，ウル・スランゴール（以上スランゴール州），トレンガヌ，ドゥングン，ケママン（以上トレンガヌ州）。

4）　Tamegai「スリランカで永遠の眠りについた日本人たち―コロンボにある日本人墓地を訪ねて」
http : //4travel.jp/travelogue/10815696　（2015 年 3 月 31 日閲覧）

5）　しかしながら，当墓地も他の墓地同様に移転が決定し整備される予定であるという。移転に際して墓標は基本的に破壊されるため，墓地景観とともに日式墓標がすべて消滅するということになる。
高雄市殯葬管理處
http : //mso.kcg.gov.tw/ch/DocumentList.aspx?xeJSAsDEoefdRHOw0%2F%2FQvYjBuNtAwKpEG2EHBIXFswjNLHrSVFDSeE7nQsiVmpaPVwvTxxT8z4yF6eU5JJ8efA%3D%3D
（2015 年 3 月 31 日閲覧）

## 引用・参考文献

（日文）

青木澄夫　2013 「オランダ領東インド（蘭印）時代のスマトラ島メダンにおける 1910 年代までの日本人社会の形成と変遷」『貿易風 ―― 中部大学国際関係学部論集 ――』8　pp. 125-145

赤岩昭滋　1973 「香港の日本人墓地 ―― 船員の墓碑を中心として ――」『海事史研究』21　p. 66-81

明永久次郎　1943 『仏印林業紀行』成美堂書店

石井研堂編　1908 『漂流奇談全集』博文館

市川義範・小筆睦・森喬編　1991 『クアラルンプール日本人墓地写真と記録と改修事業』クアラルンプール日本人会

池上　悟　2003 「近世墓石の諸相」『立正大学人文科学研究所年報』40　pp. 15-45

石牟礼道子　1989 「『シンガポール日本人墓地』のこと」『仏教』6　pp. 2-6

泉　健　2006 「文献にみる玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要人文科学第集』56　pp. 25-47

伊藤孝司　2012 「日本人墓地訪問と遺骨収集」『金曜日』914　pp. 18-21

岩生成一　1941 『南洋日本町の研究』南亜文化研究所

岩下哲典・村田和美・李香蘭　2007 「香港墳場の日本人墓地研究資料について」『明海大学教養論文集：自然と文化』19　pp. 46-64

岩下哲典　2008 「香港墳場(跑馬地)日本人墓地の研究資料」『東方』331　pp. 8-11

岩間孝夫　2013 「ハルピン市方正県に建つ日本人公墓」『Think Asia』11　pp. 3-5

インド・ムンバイ日本人会編　2009 『西海の地に眠る大志と孤愁：ムンバイ日本人墓地 100 周年記念誌』インド・ムンバイ日本人会

江南健児　1923 『新上海：附・蘇州杭州南京案内』日本堂書店

王　維坤　2008 「西安で発見された在唐日本留学生・井真成墓誌の最新研究：井真成墓誌に関する研究後篇」『日本研究』37　pp. 55-90

小原大衛編　1894 『寛政年間仙台漂客世界周航実記』博文館

上東輝夫　2001 「東マレイシア地域の日本人墓地の現状と史的考証」『NUCB journal of economics and management』45-2　pp. 241-250

上東輝夫　2007 『東マレーシアの歴史に映る日本人の光と陰 ―― サバ州，サラワク州，ラブアン島』新風舎

木崎良平　1977 「竹内徳兵衛船の漂流について」『立正大学文学部論叢』57　pp. 40-60

朽木　量　2008 「物質文化からみたマレー半島の日本人移民 ―― 墓標に表われた移民社会とその特徴 ――」『国府台経済研究』19-3　pp. 5-33

クズネツォフ，セルゲイ・イリーチ（金沢ロシア語研究会・石川県東シベリア墓参団訳）　1993 『イルクーツク州の日本人墓地』石川県ロシア協会

国松文雄　1961 『わが満支廿五年の回顧』新紀元社

黒板勝美　1928 「南洋に於ける日本関係史料遺蹟に就きて」『財団法人啓明会講演集第 27 回』啓明会　pp. 3-38

黒板勝美　1940 『虚心文集』8　吉川弘文館

甲木正子　2009 「日本人の墓，建築資材に」『西日本新聞』2009 年 11 月 2 日付　p. 4

小竹昭人　1991 「東南アジアの日本人墓地」『国際金融』875　pp. 40-41

小谷益次郎　1952 『仁川引揚誌』大起産業株式会社

済軒学人編　1915 『浦潮斯徳事情』清水太左衛門

徐　恭生（西里喜行・上里賢一訳）　1991　『中国・琉球交流史』ひるぎ社
角南聡一郎　2006　「戦後台湾における所謂塔式墓の系譜とその認識 ―― 無意識の中の「日本」のかたち ――」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉』風響社　pp. 289-311
角南聡一郎　2014　「長谷寺所蔵石造品の概要」『豊山長谷寺拾遺第五輯之一石造品』総本山長谷寺　pp. 23-26
角田他十郎編　1902　『浦潮案内』日露経済会
高瀬要一　1998　「ベトナムホイアン市日本人墓の発掘調査と保存修復計画」『日本歴史』605　pp. 97-105
武田昭子　1999　「ベトナム・ホイアン市日本人墓保存修復に関する基礎調査」『文化財保存修復学会誌』43　pp. 80-95
多田恵一　1917　『富源実査南洋西ボルネオ』広文堂書店
田辺　納　1941　『進駐前夜の仏領印度支那：調査報告と紀行』田辺納
坪谷善四郎　1917　『最近の南国』博文館
豊島久七　1936　『南蛮遊記』豊島商店
丸山兵一　1966　「釜山の日本人墓地」『親和』157　pp. 48-54
宮尾登美子　1998　「長春の日本人墓地」『波』348　pp. 2-5
森繁久彌　1957　『こじき袋』読売新聞社
森清太郎　1922　『広東名勝史蹟』岳陽堂薬行発行所
南満州鉄道株式会社地方部残務整理委員会編　1939　『南満洲鉄道附属地に於ける学校及図書館並社会公共施設の発達』南満州鉄道株式会社
原不二夫　1987　『忘れられた南洋移民 ―― マラヤ渡航日本人農民の軌跡 ――』アジア経済研究委所
樋口直樹・勝真由美・川田悠介編　1983　『シンガポール日本人墓地写真と記録』シンガポール日本人会
開　勇　1976　『清津から平壌へ』開勇
香港日本人倶楽部墓地管理委員会編　2006　『香港日本人墓地：写真集』香港日本人倶楽部
マレイシア各地日本人会編　1999　『マレイシアの日本人墓地及び墓碑』在マレイシア日本大使館
山崎朋子　1977　『サンダカンの墓』文藝春秋

（中文）
羅　燕妮・陳　文耀　2006　「從香港日本人墓地碑文看日本人在香港活動之歴史轉變」李培德編『日本文化在香港』香港大學出版社　pp. 27-64

（英文）
Lim, Patricia　2011　*Forgotten Souls : A Social History of the Hong Kong Cemetery* Hong Kong University Press.

**図版典拠**

図 1　池上 2003，図 2　高瀬 1998，図 3　甲木 2009，図 4・5　樋口・勝・川田編 1983，図 6　市川・小筆・森編 1991，図 7　原 1987，図 8　マレイシア各地日本人会編 1999，写真 1～4　角南撮影。

## 要　旨

開国後の近代に，日本人は世界各地に大量に移住・移動するようになった。移住先で亡くなった場合に，多くの場合は日本人墓地という独立した区画を形成し，埋葬され墓標が建立された。本稿では，特にアジアにおける日本人の墓地墓標についてそれらの記録や研究について概観し，その上で各地の墓標形態を中心に検討を試みた。

墓標はそれぞれの民族性を反映することが知られ，その形態は国々で異なっている。日本でもこれまで独自の墓標が建立されてきた。後述する「日式墓標」がそれである。移住先でも当然ながら母国同様に「日式墓標」が建立されるのが普通である。また，旧植民地である戦後台湾では，戦後も台湾人の墓に日式墓標が採用され展開することが知られる。この現象が極めて特異なものであることを確認するためにも，他の旧植民地や非植民地へ移住した人々の墓標との比較が肝要だと考えた。

アジアの植民地，非植民地の事例からすると，日本人は日式墓標を採用した。戦後の旧植民地では日本人の墓標は破壊，処分されるなどして姿を消した。台湾同様に朝鮮でも同化政策が実施され，日本文化の押しつけがなされた。しかし，戦前に日式の墓標が建立されたということは寡聞にして聞かない。韓国では少数の墓標が現存もしているが，そのかたちをわざわざ採用しているという例を知らない。非植民地では日本人はマイノリティーであり，墓標は日本式のものであることがほとんどであるが，現地の墓標のかたちを採用するものが少なからずあった。これは現地社会との関係や同化の過程を示すものと考えられる。

台湾では日本に起源をもつ日式墓標が，戦後も形を変えながらも継続して建立され続けている。このような現象がおこったのは台湾だけである。その理由は単に墓の面積が少ないという経済的理由や，火葬にマッチしたかたちであるというものだけだったのだろうか。台湾では意識されなくとも，具現化される過程で日本の文化やイメージの残像が潜んでいたのではなかろうか。戦前から戦後の台湾と日本の関係を考察する場合，意識される部分は当然ながら無意識の連続もあり得るということが，墓標という物質文化をして物語ることができると考えられる。


**キーワード**：アジア，日本人，墓標，植民地，台湾


## Summary

In modern times, Japanese people emigrated in large numbers to various places throughout the world. When they passed away in these places, in most cases they were buried with headstones in separate Japanese graveyards. This paper focuses on such headstones found on the Asian continent. After providing an overview of records of and research on them, it considers the forms they took in various localities.

As objects that reflect different ethnicities' characteristics, headstone forms differ in various countries, and Japan is no exception. Japanese headstones are referred to as Nisshiki bohyō 日式墓標（Japanese-style headstones), and were normally erected in places Japanese people lived overseas in the same way as was done in Japan. After the Pacific War in the former colony of Taiwan, Taiwanese people also used these Japanese-style headstones. The rather unique nature of this phenomenon can be seen if one compares the situations surrounding headstones of Japanese people who emigrated to other places, both colonies and non-colonies.

In both colonies and non-colonies, Japanese people used Japanese-style headstones. In former colonies after the Pacific War, Japanese headstones were destroyed and disposed of. As was the case in Taiwan, in Korea assimilation policies were enacted that forced people to adopt Japanese culture. However, one does not hear of Japanese-style headstones being built there before the Pacific War. While today a small number of them do exist in South Korea, there are no cases of South Koreans specifically choosing to use them. In non-colonies, the Japanese minority almost always built Japanese-style headstones. However, there are a few cases of the styles of these countries being used, a reflection of their relationship with local society and process of assimilation.

Even after World War II, in Taiwan Japanese-style headstones have continued to be built while changing form. This phenomenon is unique to Taiwan. Rather than just being for economic reasons（lack of grave space）or due to the fact that they are suited for the burial of cremated remains, it appears that they are — perhaps unconsciously —built because of an afterimage of Japan and its culture. The material culture of headstones shows that not only conscious but also unconscious continuity can exist in the relationship between pre- and post-war Taiwan and Japan.


**Keywords** : Asia, Japanese, Headstones, Colony, Taiwan